

# 後鳥羽院和歌論

三十五回卒

竹之内 真奈美

## 序

『隱岐本新古今和歌集』と呼ばれる歌集が存在する。承久の乱の責により、隱岐へ配流の身となった後鳥羽院が、一度は完成を見た『新古今和歌集』を、再度精選したものである。その存在に、院の和歌に対する執念を感じずにはいられない。本論では、『隱岐本』を中心に、院の隱岐における文学活動を、和歌・歌論・選歌の三章に分け、それらの基礎となる院の和歌観を論じていきたい。

## 第一章

隱岐配流後の院の詠歌は、『後鳥羽院御自歌合』『遠島御歌合』『遠島百首』『詠五百首和歌』及び『増鏡』等に含まれるもの、計六八八首である。本章では散文を除く四作品について、考察の便宜上、寺島恒世氏の説をもとに、配所における詠歌活動と和歌をそれぞれ二類に分けた。

一、詠歌活動 a 唯一の「都」的営み（歌は、家隆らを通し都人の目に触れることを意識して詠まれたものである。）  
b 精神的浄化作用（歌うという行為により、配流による

精神的苦痛の解消を図る目的）

一、a 和歌 a 実感実情歌（配所の現実を厭う体験告白・感情吐露）

一、b 芸術和歌（和歌文学における理想を追求した歌であり、体験による感情は含まない）

以上の分類により各作品の考察を行った。

(1) 『後鳥羽院御自歌合』略

(2) 『遠島御歌合』 院の歌一〇首中実感実情歌といえるのは四首であるが(1)と同様無技巧な歌ではない。残る六首が芸術和歌といえ、歌の理想・表現技巧などを追求する姿勢が感じられるが、それらの基調として流れるものは、寂寥をした哀調であり、配流の影響は否定できない。(1)と同様和歌がこの様な二面性を持った理由は、作品の成立事情によると思われ、出詠者が全て院の近親者であった為、前者は彼らへの私信の役割を持ち、後者は彼らに伍し得る自信作を揃えたものと思われる。

(3)『遠島百首』前出の二作と異なり、明確に実感実情歌と分類されるものが殆んどであり、しかも激情を押さえ得ぬような憤怒・絶望・悲哀の歌で、それ以外の歌も配所の生活を哀切に詠んだものが大半である。これは、『遠島百首』が、主に精神的浄化作用の役を担って詠まれたものであり、都人の目に触れる事を前提とせず、私的に編まれたものであろうと推察される。配流直後から長期間改作が繰返された事からも、配流によってのみ生まれた歌のみを手元に置き、慈んだものではないかと思われる。

我こそは新島守よ沖の海荒き浪風心して吹け

『増鏡』にも見られるこの歌は、一般に傷心落莫の歌とされるが、本章では自然現象さえ威圧する帝王ぶりの歌と解釈した。<sup>注2</sup>或る時は悲嘆に喜れ、或る時は帝王ぶりの歌を詠む事はへ至高の地位の人間としての精神の自由さ<sup>注3</sup>を示すものであり、内面世界を投影するものである。

(4)『詠五百首和歌』四季・恋・雑の六部からなり、実感実情歌は雑百首の多くを占める他、四季の部に数首見られるが、それらは配流の孤独の中で、仏に縋りながら静かに沈静し、諦観の境地に向っていると言われている。<sup>注4</sup>しかし、遇えぬ嘆きを多く詠んだ恋の歌に、院の真の苦悶を見る事はできないだろうか。

くやしくぞたのむもつらし水のあはのさえてとまらぬ  
人の情を

わすれゆく人の心を嘆く間に我袖さへも色かはりけり  
一方、芸術和歌と呼び得る歌にはへ吉野へ宇治等の

歌枕が多用されている。歌枕の性格をへ歌心を誘発し観念的構成に役立つ<sup>注4</sup>ものとすれば、より体験による感情は廃せられ芸術としての純粹性は高まったと言え、悲愁が全体の基調をなしているものの、総体的に、『三体和歌』に於いて示された歌の理想と歌の根幹をなす心情を追求したものとさえよう。都人の目に触れる事を意識して詠まれたかどうかは推察し得ないが、この作照が、院の隠岐における歌の集大成であり、実感実情歌では、配流の生活で辿り着いた心境を託すと共に、芸術和歌においては、数十年に及ぶ詠歌活動による歌の境地へ『三体和歌』に示した理想をなぞり、そこに情緒の深さを加味したものが示されている。そしてそこに実情を主として詠んだ実感実情歌からの影響が働いたと推察できるのである。

第一章での考察を通し強く感じた事は、院と和歌との関係の深さである。実感実情歌は時々の心理状態を忠実に写し出し、芸術和歌は院の生きる支えとして存在し、歌としての完成度を高めていったのである。配流前の院にとっての和歌は、古典的憧憬による芸能の域を脱してはいなかったが、隠岐に於いて初めて歌が院そのものであるかのように欠く事の出来ないものとなったのである。遠島という場所に隔離された事によって、その内面世界の表出、或いは拠り所として新たな作歌意欲を得た（歌を詠まずにはいられなかった）事は歌人・後鳥羽院にとって幸いであつたと言わねばならない。

## 第二章 隱岐における歌論

(1)『遠島御歌合』判詞・判詞に使用された評語を、肯定的評語と否定的評語に分けると、前者は、△やさし・おかし・うるはし・めずらし・たけ・えん▽等、歌の姿・詞・詞続きに対する評語が多い他、△歌がら▽のように歌の全体像を示すと思われるものも見られる。一方、院の唯一の勝歌に対し、

今少し、心さしもふかかるへければ

とあるように、作歌動機を含む、歌の支柱をなす心情・情緒、すなわち「心」も評語として見られる。このように、院は判に対し「姿」と「心」という二つの基準を用いたのである。

(2)『後鳥羽院御口伝』・歌仙評に使われた主な評語は『歌合』とほぼ同じであるが、△たけ▽が多く使われており、院の好みの歌であった事が察せられる他、△もみもみ▽が俊頼齋院、定家評に使われながら『歌合』判詞に一度も使われていない事から、表現技巧の一つとして認めてはいたが好まなかった事など、院の好尚が窺える。又「心」に関しては俊成、西行評に対し、

最上の秀歌は詞も優にやさしき上心が殊に深く

と使われるなど『歌合』判詞に対し「心」重視の姿勢が見られる。又歌仙評の中心をなす定家の「生田の森」の歌

秋とだに吹きあへぬ風に色変る生田の森の露の下草

に対し、△詞のやさしく艶なる他、心もおもかげもいたくはなきなり▽とし、俊成・西行と対比されている事からも

院の「心」に対する考えが窺える。この歌の特徴は、幻想のイメージと評された点<sup>注5</sup>にあり、それは定家の歌論で「景気」とも言えるものである。しかし院はこの歌の勝れた点として、△詞つゞき▽△詞の優しく艶なる▽など、歌の「姿」のみしか挙げていない。院の歌論に於いては「余情」は「心」に含まれるが、「景気」とも言えるこのイメージは、詞によって生まれた二義的実体のないものとしてしか認識されず、それを生み出した「姿」のみ認められているのである。しかし、障子和歌の採歌時には慈円の歌をとり、「御口伝」執筆時において評価を翻した事を考えると、配流後定家の歌の特質をより高く評価したと考えられる。定家と院の対立は、二人の歌論の基準が異った為の誤解であったと言える。

(1)(2)を通し院の歌論を考察すると、歌の「心」と「姿」の融合と言える。その「心」は「八雲御抄」に入ただ歌といふものは心を本とすべきなり▽というほど強調されず、俊成にいう「幽玄」△あはれの心が表現を通してどこなく感じられる▽という程実体のないものではない。確かな情意として「姿」を支えるため存在するものであり、「姿」も新古今の技巧や知的構成に走ったものではなく、うるはしいもの・やさしきものが庶幾されておき、「心」によって支えられた「姿」が院の求めたものといえよう。

### 第三章 隱岐における選歌基準

(1)選者名注記考 略

(2)『時代不同歌合』・収められた三百首は院が秀歌と認め

勅選集		
古今集	36	
後選集	26	
拾遺集	27	
後	23	
金葉集	17	
詞花集	11	
千載集	39	
新古今集	104	
新勅選集	10	
續古今集	3	
續千載集	1	
その他	3	
計	300	

た歌といえるが、勅選集別に見ると『新古今集』から最も多くとられており、院の嗜好を示すと共に『新古今集』に対する自負が感じられる。また『御口伝』で評された一五名の歌人も含まれており、選歌活動と歌論の一致をみている。そこで、『御口伝』でへ心あるようなるをば庶幾せずと評された定家の歌（三首共に『新古今集』からの選入）について考察を行った。

さむしろやまつよの秋の風ふけて月をかたしくうち  
の橋姫

さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋  
姫（本歌・古今集）

左の本歌と比べる時、本歌が時間の推移に重点を置くのに対し、橋姫の牙え牙えとした妖艶な姿が映像的に浮かび上がる、定家らしい感覚の鋭さを感じる歌である。詞の艶が、それに停らず、芳香の如く「景気」として妖艶を放つ様であり、「生田の森」の歌と共通し、院の歌論における「心」は無いとされる歌である。しかし、この様な歌を選入した事により、院が定家の歌の特質を見極め、歌論に沿わない歌も柔軟に受けとめていた事が推察されるので

ある。残る二首

ひとりぬる山鳥のおのしだりおにしもおきまよふとこ  
の月影

さえわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露をみると、前者はへ白い霜と白い月光との鋭い官能の交錯からくる幻想美<sup>まじ</sup>を醸し出しており、幻想的映像的な歌である。後者は、縁語・掛詞・歌枕を用い、待つ身の辛さを詠んだものであり、前出の二首ほど映像的ではないが、上句全てが微視的へ下露へに集束する構成は独得のものであり、へ森の下露へに夢幻の情趣を象徴させた点で、やはり前出の二首と共通する歌である。

定家に対し、院自身の歌の考察を試みた。三百共に『新古今集』からの選入歌である。

- (1) 桜さく遠山鳥のしたりをのなかなかし日もあかぬ色哉  
(2) 秋の露やたもとにいたくむすふらん長きよあかすやと  
る月哉

(3) 袖の露もあらぬ色にそきえかへる移れはかはる眺め  
せしまに

(1)は『後稿本』においても差し換えられず残された歌であり、『新古今』入集歌（三十三首）中最も愛着の深い歌であったと思われる。その歌が、さきに挙げた定家の歌と本歌を同じくする事は興味深い事だが、定家が山鳥に材を求め幻想的イメージを詠んだのに対し、院は山の桜を春の日のでたい情景とし、へ長々へあかぬへに賀の意を込め雄大に詠み上げており、非常にたけ高く、詞はうるはしい

様である。これは院の「心」「姿」二元の院の歌論に沿った歌といえよう。(2)(3)の歌も同様であるが特に「姿」の上での苦心が見える。これら三首は「心」「姿」の両面が重んじられているが、『御口伝』の筆致よりは多少「姿」重視の傾向が見られる。これは理想を述べた歌論と実際の詠歌との差と推察される。

後稿本の伝本は院の歌二首のみの相異により甲乙に大別され、配流後の歌観の変化が窺える。甲本で差し換えられた各二首は、いずれも隠岐に於いて詠まれた歌であるが、第一章で分類した「実感実情歌」ではない。この四首は純粹に和歌理想を追求したものであり、古今の歌仙達の秀歌に自らの歌を並べるにあたり、感情の吐露を目的とした実感実情歌、即ち「心」「姿」の割合が極端に大きい歌を選ばず、これらの歌を選んだ事は、心姿両面を重んずる院の歌論を証明する上でも注目される。その他、甲本の二首と乙本の二首には各々共通点があり、それによって各成立時の自詠歌に対する歌観が窺える。

甲本の二首は両首共比較的さらりと言い流したものであり、時間的推移を詠んだものであるのに対し、乙本の二首は幻想的映像的特質が見られる。

ひさかたのかつらのかげになく鹿はひかりをかけて声  
ぞさやけき

特に右の歌は、枕詞・中国の伝説にいう八桂の木∨・八光をかけて∨の表現法・八さやけき∨鹿の声など幻想的情景をイメージさせる美的感覚にたけた歌であり、そこに定家

の歌との共通点を見る事ができるのである。

甲本と乙本の成立の前後は判明していないが、それぞれの特質を考察し、推察すると、乙本が後の成立ではないかと思われる。乙本の二首に見られる着想のおもしろさ、幻想美等を備えた歌は第一章の考察から見ると『遠島歌合』以降『詠五百首』にかけて増えており、配流直後は多くない。推論ではあるが、文暦二年、幕府への還京要請が却下され、帰京の望みが絶たれた後、和歌の道だけを抛り所に後稿本の選歌を行ったのではないか。そして時間の経過による心理状態の変化が、甲本・乙本の違いとなって表われ、帰京の望みが薄れるにつれ、和歌への思いが強くなり、乙本に見られる新たな形の歌を多く詠み自選歌とするに至ったと思われる。

以上の考察から、『時代不同歌合』の選歌基準は「心」「姿」二元に置かれるが、『御口伝』に比べ「姿」重視の姿勢が見られ、しかも自詠歌においては時間の経過に伴い変化がみられる等の結論が見られる。

### 第三節 『隠岐本新古今和歌集』

跋文から、成立時期が文暦二年(一二三五)以降延応元年(一二三九)以前であり、その制作動機が入集歌数の多さと自詠歌の多さにあり、『新古今』の選歌には自らの意志が反映されたが猶不満が残っているなどの事が考察される。また八八重垣の雲の色に染まん輩は(中略)はるかなる世に残せとなり∨の末文は『隠岐本』を後世の歌人を導くものとして伝えてほしいとの切望であるが、そこに高齢

の院の孤独と、還京要請の却下による孤独を見る事ができるのである。

次に院自身の削除歌の削除理由を考察する事により、配流後の選歌基準を導く。院自詠歌の削除数が最も多い事は表一（一五首以上の入集歌を持つ歌人の削除割合）からも言えるが特に四季部からの削除が多い。その理由として次の考察を試みた。

『新古今』における特質は四季部にある。新古今歌風は八幽玄を新たな余情妖艶の体に包み込んだ $\vee$ ものと言われるが、その新たな試みは、古歌においてもその内容から自然と妖艶美を帯びる恋歌でなく、八ただ詞にまかせていたれども心も深く（古来風躰抄） $\vee$ といわれる四季の歌に對して行われたのである。そこで院は、新たな試みのもとに新古今歌人として詠んだ四季の歌に對し、何らかの不満を感じ削除したのではないかとの推測ができれば得るのである。この仮説を証明し、選歌基準を導くため一八首の削除歌から数首を選び考察する。

683このごろは花も紅葉も枝になししばしなきえそ松と白雪一読の限りでは難点は見つからない。本歌（『後撰集』）に八松の白雪 $\vee$ という新たな情景注を持ち込む手法は院の得意とするものである。丸谷才一氏は定家の

見わたせば花もみぢもなかりけりうらのとまやの秋の夕暮

と比べ八彼の模糊に對する此の明確はすでに際立っている $\vee$ とし、院の明快さ・色彩的鮮明さを指摘しておられる。

これは、さきに述べた新古今新風を顕著に含んだ歌と言え  
るが、院の削除理由はむしろその点にあったと思われる。冬  
の歌に求められる八ほそくからびたる姿（三体和歌） $\vee$ ・  
本歌の心である花も紅葉もない寂寥感が、新古今的艶味に  
よって掻き消されたための削除であり、初期における歌観  
と晩年のその相違といえよう。

133みよしのの高嶺の桜散りにけりあらしも白き春のあけぼ  
の

建永二年『最勝四天王院障子和歌』に於いて詠まれた歌で  
あり、満山の花が曙の空に吹き散る壮大な構図で、帝王ぶ  
りの長高き歌である。また詞の運びは『御口伝』で院が  
八恐ろしかりき $\vee$ と評した寂蓮の歌からの影響が指摘され  
ており、八み吉野・桜・春の曙 $\vee$ が院の好んだ詞である事  
も含めて、この歌の削除理由が歌観の変化にあるとは考え  
難い。考察し得る理由は帝王から配流の身への転身である。  
この歌を帝王の歌として解釈すると吹き下ろす山風のみが  
白く見えるのではなく、山風を覆うみ吉野の里も白く覆  
われて見える構図である。地上を覆う高嶺の桜を帝王の勢  
力・御加護と見ると、春の曙は陽光麗らかな詞であり、自  
らの治政による平和であるとの自負が感じられ、至高の地  
位の人のみが詠み得る歌である。当時の政情不安や、熊野  
本宮の炎上などの不穏な空気を払拭するため自らの威信を  
示すための歌といえよう。とすれば政変によって配流の身  
となった時点で帝王ぶりの歌を残す事は虚しいばかりであ  
る。この様に、歌観の変化によらない、心情の変化による

削除が数首見られたのである。

次に比較の意味で定家の削除歌を考察する。

363 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮  
三夕の歌として有名であるが古来解釈が分かれ難解さの点で削除されたとも思われる。<sup>注</sup>しかし和歌の特質を、修辞等を含めた曖昧性とするこの説には疑問が残る。そこでこの歌を『源氏物語』との関係において見てみる。この歌には△光の君が（略）旧時おのが華やかな姿を追うている▽との解釈があり、配流の身となった今、この様な歌、しかも『新勅撰集』の成立において院を蔑ろにした定家の歌を残す事は出来なかつたのではないか。だが、和歌への執着の強い院がこの様な私情による選歌を行ったかは疑問でもある。院と定家の削除歌を比較すると、両者ともに(1)心姿二元の均衡を欠くもの、(2)配流による心理的变化によるもの二つに分けられた。定家の難解な歌は、酔いしれる様な情趣に浸り新たな世界を構築するため重層的詠み方をしたものであり、院の望んだより深く明確な「心」が不鮮明であ

ったと言えるのである。

三章では選入歌と削除歌という対称的な立場から、選歌基準を考察してきたが、その根底において心姿二元の融合という院の歌論が生かされていた。そしてまた『隠岐本』では心理的变化による削除も見られたが、一首一首の歌を吟味する時、その歌を通し往時の記憶を辿ったのであろう。本稿では、院の後半生に重点をおいて考察を行った。配流という類稀なる体験によって、自然に湧き起こる作歌衝動による実感実情歌を得る事により、「心」重視の姿勢・態度をもち、『新古今』を通して培った表現技巧、宮廷文化の伝統と合わせる事により、晩年の歌風・歌論へと発達していくのである。それは、遠島という隔離された場所だからこそ、外部からの影響を受けず、内面世界を充実させた結果だといえるだろう。「心」と「姿」の融合こそ院の到達した歌観だったのである。

表 1

作 者	削除 / 収集	%
後鳥羽院	(18/33)	0.545
通 具	(6/17)	0.353
紀 貫 之	(9/32)	0.281
伊 勢	(4/15)	0.266
和泉式部	(5/25)	0.2
宮 内 卿	(3/15)	0.2
秀 能	(3/17)	0.176
西 行	(13/94)	0.138
雅 経	(3/22)	0.136
定 家	(6/46)	0.130
有 家	(2/19)	0.105
俊 成 女	(3/29)	0.103
慈 円	(9/91)	0.099
俊 成	(6/72)	0.083
家 隆	(3/43)	0.069
撰政太政大臣	(5/79)	0.063
好 忠	(1/16)	0.062
寂 蓮	(2/35)	0.057
人 麿	(1/23)	0.043
式子内親王	(2/49)	0.040
菅贈太政大臣	(0/16)	0
経 信	(0/19)	0
讚 岐	(0/16)	0
後 徳 大 寺	(0/16)	0

- 注1 寺島恒世「後鳥羽院隱岐の歌」(「国語と国文学」昭和五三・七)
- 注2 丸谷才一「後鳥羽院」筑摩書房 昭和四八・六
- 注3 樋口芳麻呂「後鳥羽院」(「中世の歌人I」日本歌人講座3) 昭和四三・九 弘文堂
- 注4 谷山茂「新古今集とその歌人」(谷山茂著作集五) 昭和五八・一二 角川書店
- 注5 藤平春男「新古今とその前後」 昭和五八・一 笠間書院
- 注6 武田元治「中世歌論をめぐる研究」桜楓社
- 注7 石田吉貞「新古今和歌集 全注解」 昭和三五・三 有精堂
- 注8 樋口芳麻呂「時代不同歌合考」(「国語と国文学」昭和三〇・八)